

## よりよい後進育成を目指して

小川 清

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



コンピューターの処理能力は飛躍的に向上し、われわれの生活でもスマートフォンやタブレット端末が身近にあることが当たり前となり、電子メールを駆使してコミュニケーションを取ることが仕事のやり方となっている。わが国だけでなく欧米、そしてアジアでも多用され、最近訪れたバングラデシュでもスマートフォンの普及は想像以上だった。

コンピューターは医療の中にも急速に取り込まれてきた。当初われわれは、CT装置のキーボード・アレルギーに取りつかれ大きな問題となったが、それをクリアすると病院内でコンピューター知識を持つスタッフとして、その後のオーダーリングシステム・PACS・電子カルテ導入で大きな貢献をした。

社会・経済情勢の速い展開は当然ながら医療にも及び、医療を取り巻く環境の激変とIT導入は大きな関連を持つ。医療に関する情報量は飛躍的に増加し、知識のターンオーバーもどんどん速くなっており、医療に対する患者の期待も変化・多様化してきた。

こうした環境下で、医療を継続的に発展させていくためにはITを利用することも重要であるが、医療者一人一人の能力向上が強く求められている。医療における人材の重要性はとても高く、知識や技術のみならず、信念・誠実さ・意欲・チームワークやコミュニケーション力・責任感や倫理観などを持った医療者が必要とされる。

従来、卒後教育の大部分は職場教育として、指導者の考え方にに基づき自分が受けてきた教育法を先輩に行ってきた。「盗んで覚えろ」式教育法がまかり通った時代が過ぎて、その後、個別に口頭で行う指示的教育法だった。そこでは標準という概念はなく、自己流を押し付ける教育法だった。「盗んで覚えろ」はプロ野球やサッカー選手では通用しても、国民の健康を守る医療分野ではあり得ない。その後、作業をマニュアル化した教育法が普及したが、後輩をどのように指導するかという教育指導法の確立にまでは至っていない。

医療の著しい進歩は、医療人の教育システム化を求めている。そこには、どのような診療放射線技師を育てるのかというコンセンサスが重要であり、かつその施設に応じた教育システムの柔軟性が求められる。

医療者は、生涯教育を受けることが必須といわれてきたが、一方で、医療者が医療者に教育を行うことが求められている。昨今、大学に診療放射線技師の教授陣が増えてきたのは頼もしいが、医療機関においても大学院で教育指導法の教育を受け、修士や博士号を取得し医療教育の基本を身に付けた指導者が、それぞれの現場に即した教育法を生み出してほしい。生まれた時からインターネットやパソコンのある生活環境の中で育ってきた、Digital Nativeと呼ばれる世代を次の診療放射線技師職に育成することは、われわれの義務であり責任である。

井の中にいる人を招き入れることができるか。技師会の責任は重い。